

『地下水放射能汚染と地震』を読んで

(江口工著 オークラ出版 2012年 1500円)

伊大知重男 (会員・環境委員会)

故発生時は、官邸、関係官庁、東電関係者より数度、

「対策」への意見を求められた経験を持つ。

〈F-1〉事故

筆者が2012年千葉県柏市あけぼのに住んでいた際、約200m離れた「窪地」は高放射能検知地区として進入禁止のテープで囲われていた。また、約2km離れた川沿いの散歩道は、100mごとに放射能計測値が表示されていた。どうして、福島より200km以上離れた遠い柏で高線量が現れるのか、サッパリ解らなかった。単に「風に乘って来た、ホットスポット地区」程度で、「何故、柏なのか」の疑問は長年引きずっていた。

●地下水の地球的躍動

日常、雨雪が地表に落ちた先の行末までは思いをはせない。たまに川に接したとき、これの「元」はソレかと思うぐらいで

ある。だがこの「水源」は地下に浸みこみ、水流・水脈となり地表の川や湖よりも多層的・複雑な経脈を形成し広範囲に移動する。それは必ずしも「高から低へ」ではない。地層構造によっては「低から高へ」移動するのである。このような「地球的移動の水源」地下水の実勢を紹介し、かつ、福島第一原発〈F-1〉事故の放射能汚染と地下水の知られざる影響を警告し、それへの対策までも提起したのが本書である。

著者江口氏は60有余年、種々の地下開発の調査、研究に携わり、ボーリング機器の開発と施工に従事、100か国以上で活躍し、チェルノブイリをはじめ、アフリカ、北朝鮮などに出かけた技術者である。〈F-1〉事

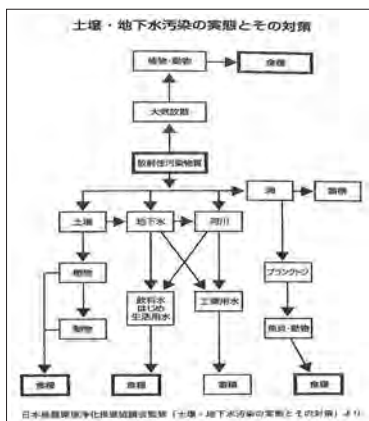
は日本では初めての事故故であるが、我々は既にスリーマイル島やチェルノブイリを経験しているのだから、日本政府、東電などの当事者は、あたかも未曾有の重大事故の名に隠れて「パニック状態」に終始し、事故対策が確立されないまま、いたずらに時を費やし、本書によれば、見通し曖昧のまま「冷温停止状態宣言」や被災者の早期帰還の言が出る始末であると評している。本書は告発する、「原発事故は決して収束に向かっていない」「大問題が未だ東電によって隠蔽されたままなのだ」と断定する。

そして、本書第22刷発行年の2018年も、今もこの状況は変わっていない。

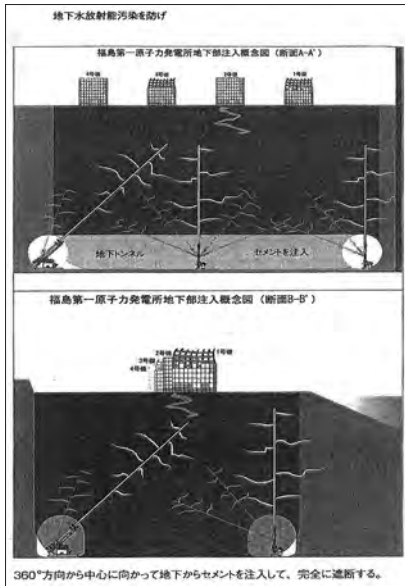
●福島原発〈F-1〉と地下水

その隠れた問題とは原発立地点の地下部分の放射能に汚染された「地下水」の対策が取られていない状況であること、加えて〈F-1〉の原子炉基盤は原子炉全体の沈下や傾倒が既に始まっている可能性を示す事例が見受けられることを指摘する。空中に飛散した放射能が汚染の主な問題と想像していたが、実は事故より漏れ出た放射能が地下水脈に触れ、地下水が汚染される方が大問題である。

①のように、留まることなく拡



図①



図③

注入を行い、原子炉を地下から包み込むようにする方法を最も有効な対策として提言している。(図③)
この方法はチェルノブイリで提案し実

散してしまうからだ。我々の生活用水の約50%は地下水によっている。
〈F-1〉周辺の地下水が汚染されることは原発周辺や海洋を汚染するだけの問題ではない。

江口氏は地下の放射能漏れに対しては原発の地下に向かってトンネルを掘削し、地下トンネルから炉心に向かってセメント



図②

福島全域、関東一円、ましてや首都圏まで放射能汚染で取り返しがつかなくなる危険性を秘めている(図②)。この点、政府、各行政、東電、そして国民も、その危険性に対する認識が甘いと言わざるを得ない、残念である。

行されている由。特筆すべき事例である。

著者の提案するセメント注入方式はチェルノブイリ原子炉の「石棺」と同時に当面、現実的対策と思われる。しかし、今後の廃炉対策の中で廃棄物が全ての場所で漏れないと誰が保証できるであろうか、将来の世代が飲料水として利用する地下水層を汚染しないように廃棄物の永久的な冷却と密封を保証するため、新しい技術が求められると思う。

●低線量放射能問題

原発大国の米国では、最初の原爆が作られる以前から、米政府は人間の体内に取りこまれた核分裂生成物の低線量放射能が危険なことは判っていた。放射能は無色、無臭で相当な量を浴びない限り感ずることはない。このことは、多くの人が〈F-1〉事故で経験し、関連情報によって知ることになった。が、体に良くないことだけは確かだ。

特に低線量の被爆というのは急性の障害は引き起こさないが、慢性疾患の基になりうる。低線量被爆の被害症例は、スリーマイル島、チェルノブイリ事故後の疫学的統計分析により示されている。蒸発しやすい放射能元素のヨウ素131とセシウム137は空気中で冷やされ微粒子となり何千キロ離れても、風に乗って飛ばされる由、拡散されたそれらは、当然地表および地下水を汚染する。地下水の低線量放射能の浸透拡散は恒常的問題として広く、多くの人が関心をもち「対策化」に声を上げるべき問題である。

国民は次世代を含め放射能と共に生きていく道を歩むことになっ

●結び

あれから8年、東日本大震災と津波により、福島原発事故が起こってすでに3000日過ぎたことになるが、放射能の危険性について被災者、地域住民は